

高宮正貴 著

『価値観を広げる
道徳授業づくり
—教材の価値分析で
発問力を高める—』

北大路書房、2020 年
260 頁、2,500 円（税別）

筆者の高宮正貴氏は教育哲学、道徳教育学を専門とする研究者である。本書の目的は(1)道徳の目標を授業に具現化し、(2)道徳科の必要性を教育哲学・倫理学の立場から説明し、(3)道徳科に対する批判に答えることにある。カントの理想主義とデューイの現実主義に裏付けされた道徳科教育書で理論的なことも学べる貴重な本である。

第1部の理論編(第1～5章)と第2部の実践編(第6章)で構成され、理論編では「押し付け道徳」乗り越えを前提に、本書の道徳科の考え方が説明されている。

第1章「道徳科の目標」では本書の多元主義的普遍主義の立場を示し、価値レベルでは普遍的な複数価値が並列して対応し、行為・判断レベルでは答えが多様であることに言及する。この立場なら特定の価値を学んでも子どもの多様な価値観を引き出すことが可能であるという学習指導要領の読み方を示している。第2・3章では所謂「読み取り道徳」と揶揄された「心情追求型」授業を「問題解決型」と比較しその復権を図っている。その鍵は自我関与を促す投影的・批判的発問—発問力は本

書の副主題—にあり、子どもの主体的な判断を促すと述べている。

第4章は65頁にもわたり「押し付け道徳」に陥らないための方策が説明され読み応えがある。先ず価値／価値観の「押し付け」と「教え込み」が峻別され類型化される。象限図の縦軸規準は「特定の価値観の伝達」、横軸規準は「強制・抑圧的コミュニケーション」で本書の道徳科は縦軸＝「あり」×横軸＝「ない」型である。これに従い押し付けに陥らない内容の決め方、発問の仕方、現場が陥りやすい「共通解」「納得解」の捉え方、子どもへの対応など実に多くの留意点が説明される。

本書は道徳科授業に問いをもちチャレンジしたい教員への応援の書である。道徳研修会で納得する答えを得る機会が稀だった評者にとって本書の誠実さ溢れる叙述は好感がもてるからこそ検討してほしいことを述べる。先ず子どもの主体的・自律的判断を志向しているが教員による発問や読み物教材の刺激に子どもが反応させられているようにも読める。高宮氏も参照した哲学対話や市民教育では子どもと教師の「ズレ」よりも子ども同士の「ズレ」を顕在化し議論を活発化する。水平的関係を重視する道徳科を期待する。次に「答えは1つではない」という表現も気になる。学級共同体において皆で「答えを創る」学びから新たな問いが生まれ考えが更新される。それが氏の語る「共通解」「納得解」の捉え方なら安心する。

本書は読者にさらなる思考を促す優れた著書である。実践で活用するなかで評者も一層考えを深めたい。

岡田泰孝（お茶の水女子大学附属小学校）